

ハウススプレー Q&A

きゅうり・なすの
農薬登録が
拡大しています

Q 動噴散布と何が違うの？

A 大きな違いは①無人で防除できる、②少量高濃度の薬液を使用、③動噴の50～100分の1の超微粒子を散布する点です。使用できる条件は、4～6時間程度閉め切ることが可能(夕方からOK)であること、ノズルから出た霧が直接作物に当たらないように設置できることです。フォガー部というファンと一体型のノズルから噴霧された薬液はすぐに水分が蒸発して約 $2.5\mu\text{m}$ の粒子となって浮遊します。これは高さ1mから地上に落ちるまでに一時間以上かかるほどの超微粒子で気流で拡散するのも納得できると思います。

Q 燻煙との違いは？

A 超微粒子の農薬を拡散するという考え方は燻煙と同じですが、薬剤を加熱しないという点が異なります。常温煙霧法はその名の通り常温で噴霧するため、通常の動噴散布で使用すすべての農薬が原理的には使用可能です。

Q 使用できる農薬は？

A 農薬ラベル(適用一覧)の使用法欄に「常温煙霧」の表示があるものが使用可能です。希釈倍率や使用回数が「散布」とは異なりますのでよく注意して使用してください。

Q 使用方法を教えてください。

A 規定の倍率で調整した薬液をタンクに入れ、ハウス内に設置したノズル部分にセットします。ハウスを閉め切り、ハウス外に置いたコンプレッサー部のタイマーで運転時間を設定してからファンのスイッチをON。少しおいてハウス内に気流ができてからコンプレッサーのボタンをONにすれば操作は完了です。タイマーは薬液量から計算した時間(2～4時間程度)で設定します。ハウス内に入ることができるのは6時間後になるため、基本的には夕方からの防除をおすすめします。



Q 使用できないハウスはありますか？

A タンク容量は標準7L(オプション14L)なので10L/10a散布の農薬の場合にはフォガー部1台当たりの対応面積は7a(14a)となります。ファンの対応面積は約1.2aまでですが、ハウス形状によってはうまく気流が起こらない可能性があります。また、噴霧する空間がない場合、霧が作物に当たるおそれがあります。そのような場合、フォガー部にオプションのダクトホースを取り付けて対応可能です。ダクトの約200の穴から均一に散布して一か所で霧が濃くなることが無いので安心して散布していただけます。



Q 展着剤は必要ですか？

A 超微粒子が葉の裏表や繁茂した作物の中でも均一に拡散・付着し、また小水量のため葉面で水滴にもなりません。そのため付着性・侵達性を向上させる展着剤は必要ありません。

Q 葉面散布に使えますか？

A 液肥の葉面散布にもご利用いただけます。葉の表面から散布する通常の散布方法と異なり、気孔の多い裏側にも粒子が到達するため効果的な葉面散布が行える可能性があります。

Q どのような作物に向いているの？

A 適用農薬が増えつつあるナスとキュウリでは薬効や残留農薬についての信頼できるデータもあり安心して使用していただけます。使用回数の制限が無い保護殺菌剤が散布できるため使用機会が多いです。殺菌剤散布はほとんどハウススプレーで完結できると考えられます。ナスのような葉の大きい作物ではトマト向けの走行式防除機の効果が不安だと感じている方にもおすすめです。きゅうりは成長の早いツル性の作物で、栽培期間も長いので農薬散布の機会が多い作物であり、防除や葉面散布の省力化に高い効果が期待できます。

ARIMITSU

常温煙霧法のポイント

完全無人



作業者曝露ゼロ

夕方から散布

隅々まで防除

準備が簡単

作物残留が少ない

少量散布



作物が汚れにくい

超微粒子



過湿を防止

散布ムラなし

常温煙霧機「ハウススプレー」を使用した防除は①完全無人で防除、②10aあたり5~10Lの少水量高濃度の薬液を使用、③2.5~10 μ m程度の超微粒子で噴霧という通常の動噴による散布とは大きく異なる方法です。操作はスイッチのみなので防除着を着てノズルを振る大変な作業から解放されるのはもちろん、小水量の薬液を使用するため、湿度の上昇を最小限にして病害の発生や作物の徒長を防ぎます。超微粒子で噴霧された薬液はハウスの隅々まで拡散し、繁茂した作物にもまんべんなく付着するため作業者による効果の違いも起こりません。省力的であり過湿や汚れが少なく使用機会も多いので、農薬や液肥を混用して一度に散布しなくても、それぞれを適切なタイミングで散布することができます。

ARIMITSU